

「洪水はわが魂に及び」における 「鯨の木 = 大木勇魚」の機能

藤田敏明

序章(1) 認識者と行動者

Look if you like, but you will have a leap.⁽¹⁾

「見るまえに跳べ」より

「見る」者と「跳ぶ者」、すなわち認識者と行動者との二項対立、さらには、行動者に憧れ、行動者たろうとしつつ、結局は行動に踏みきることのできない認識者の苦悩、これは、大江健三郎の多くの小説における基調的な主題の一つである。「見るまえに跳べ」をはじめ、「われらの時代」、「叫び声」、「日常生活の冒険」、「万延元年のフットボール」、いずれも、主人公たる認識者と、その前に現われる行動者との二項対立、認識者の側の行動への憧憬と挫折が主題となっている。

「洪水はわが魂に及び」⁽²⁾の主人公、大木勇魚も、明らかに、この「認識者」に区分される。しかも、第一章に描かれている〈瞑想〉——裸足となった足のうらを地面につけてすわり、〈樹木〉と〈鯨〉の魂と〈交感〉し、もってはるかな〈宇宙意志〉にまで心を通じさせようとする——から類推するに、その最も極端な型である。

しかるに、この同じ人物が、作品の終章においては、攻めよせて来る機動隊員を相手に銃撃戦を展開するという、今度は、〈行動者〉としての最極端の型を演じている。これは、従来までの、認識者と行動者との二項対立の規範から考えると、ほとんど不可能な現象である。

すなわち、小説 text 内の、story⁽³⁾の展開のプロセスにおいて、この二項対立が超越された(まさしく〈跳んだ〉)と考えられる。では、それがどこで、どのようにしてなされたのか。それを探求することが本稿の主題である。

序章(2) 視点人物としての大木勇魚

本論においては、大木勇魚の〈認識者〉としての identity を、作品内の様々な event において、〈行動者〉(具体的には〈自由航海団〉と青年達——喬木、多麻吉、ポオイ、伊奈子、等)との相互作用の中で考察する。そこにおいて重要なのは、大木勇魚がこの小説において、視点人物の機能を果たしている、という事実である。

すなわち、この小説は、一応、三人称小説ではあるが、その視点は、大木勇魚に固定されている。冒頭において、勇魚の居住生活や彼の過去に関して、いくらか第三者的説明がなされているが、それも勇魚の経験した事実関係に限られる。作品内時空間の、現在として進行する〈今・ここ〉においては、勇魚の見たこと、聞いたこと、感じたこと、経験したことのみが、text 内に顕われている。

そして彼が直接経験しなかった event は、いずれも伝聞として記述されている。

本稿において重視したいのは、視点人物として、そのような event の伝聞においても、記述の主体は勇魚であるということである。すなわち、大木勇魚が、常に discourse の中心にいる、たとえ event の側から見れば隔たった、周辺的な位置にいても、それが discourse として text に顕われた時には、必ず勇魚がその〈語り〉の中心となっている、ということである。この〈視点人物〉としての機能は、大きく〈認識者〉の立場に関係し、影響するものとなる。これは後に〈鯨の木〉として現われる topic とも関係する。

以上を序章とした上で、本論に入る。具体的には、勇魚と自由航海団の接触から勇魚の加入、そして内部の〈処刑事件〉という転機からカタストロフの銃撃戦に至るプロセスでの、勇魚の〈認識者〉としての機能の分析になる。

1. 鰭の音

その夜ふけ、(略)死滅直前の鯨たちがやって来て、避難所のコンク

リートの壁を、掌より柔らかく濡れた重さのあるもので、すなわち鯨で繰り返し叩いた⁽⁴⁾

これが、勇魚と自由航海団との最初の接触である。この時、彼が聞いた物音は、実は、自衛隊員と乱闘した自由航海団の青年が、苦しまぎれに壁を叩いた音である。しかるに勇魚はそれを、鯨の鱗の叩く音であると聞きなし、さらにはそれを、鯨からの〈合図〉と解釈する。

この〈解釈〉は、次の段階においてさらに著しくなる。彼は、湿地で起こった〈事件〉について、事件を実際に体験した刑事が同僚の警官にこれについて語ったものを、そのまた聞きの方で、〈警官たちの言葉を、かれ自身の内部にあるしるしの実在感にみちびかれて補填しながらあらためて再現〉⁽⁵⁾する。

ということは、ここで represent された discourse は、勇魚が主体となっているのである。彼は刑事に手錠で引きづられ、自分の手首を斬り落とそうと試みる〈ボオイ〉の姿を見るが、これは、彼自身による〈再現〉なのである。そしてその上に、〈遠方の海の鯨たちの合図〉をかさねて響かせる。これは完全に彼自身の恣意的な〈解釈〉である。

その前夜の事件において、確かに刑事とボオイとの格闘という event は生起した。だがその〈再現〉において、action の中心人物であるボオイや刑事の意図や行動とは全く関係なしに、大木勇魚によって、彼らは〈鯨の叫び声〉にされてしまう。ボオイにせよ、自由航海団にせよ、この時点では、〈鯨〉や〈樹木〉への関連性は何ら持っていない。ただ、傍観者である。否、傍観すらせず、二重の伝聞によつてその event について聞き知ただけの大木勇魚が、視点人物＝認識者としての特権によつて、〈鯨〉〈樹木〉に結びつけるのである。〈行動〉そのものを見れば、自由航海団側が積極的な〈行動者〉であり、勇魚は〈認識者〉でしかない。が、text に顕われた discourse の生成の場においては、勇魚一人がその〈行動〉の主体者であり、自由航海団は、何一つ手出しできない、という逆転した図式がある。

この図式は、実は、勇魚と〈樹木の魂〉〈鯨の魂〉との関係においても同じく成立している。彼は何度もそれらの〈魂〉と〈交信〉していると主張している（あるいはそう思いこんでいる）が、実際は、彼の〈送信〉が受け取られた明確な保証はない。彼は勝手に〈鯨〉〈樹木〉に向かって呼びか

け、自身が体験する出来事（人間が壁を叩く音）を、〈魂〉からのメッセージ（鯨の音＝合図）だと解釈しようとしているだけなのである。しかるに、彼自身にとっては、この主張こそが彼自身の identity に他ならない。すなわち、この証明不能の identity が如何にして確立されるが、勇魚にとっての、この小説の一つの大きな課題となるのである。

2. タカキ＝喬木

両者の接触の次の段階として、自由航海団は、シェルターの上で足踏みする、ペンキを塗る、遊園地で遠巻きにする、等、様々な行為を以て、勇魚を脅かす。そして最後に、リーダー、〈タカキ〉が勇魚の前に現われる。

おれたちは、なんの関係もないあんたに、関係がないからこそ、ひとつ関係をつけようとしているんだ⁽⁶⁾

この時点で、自由航海団側は勇魚を脅かして、無理矢理従がわせてでも、負傷したボオイの看護をさせようとしている（もし彼が死んだら、その死体を押しつけるつもりでさえいる）。自由航海団の方で、一方的に、勇魚に〈関係をつけようとしている〉のである。

しかるに discourse のレベルにおいては、前章で見た通り、鯨や樹木について〈なんの関係もない〉自由航海団に対して一方的に〈関係をつけようとしている〉のは勇魚の方なのである。

——タカキが会いたいと言っているよ（略）。

タカキ、勇魚の意識に喬木という文字のかたちをとって把握された青年⁽⁷⁾

〈タカキ〉という音声か、勇魚によって〈喬木〉という文字にされると、以後、この青年は〈喬木〉として text に顕われざるをえない。これは、彼が勇魚に対して強い行動などにより、はるかに強い拘束力を持っているのである。

現象面においては、勇魚と喬木の会談が進展するに従って、勇魚の思想

(或いは思考形態)が、自由航海団の青年達を感化し、〈人間ども対鯨・樹木〉、〈人間ども対自由航海団〉という図式を作り上げて行く。しかし、そのような、登場人物の〈相互教育〉による以上に、小説の text 内における、勇魚の視点人物としての機能が、その対立構造を堅固に構築し続け、ついには、〈人間ども〉対〈自由航海団及び大木勇魚すなわち鯨と樹木の魂の代理人〉との銃撃戦というカストロフに至る。この終末に至るには、彼らにとってより大きな転機が必要となるのだが、そこでこの役割を果たすのが、〈鯨の木〉及び〈縮む男〉である。

3. 謎の命題

「洪水はわが魂に及び」は、一応、リアリズム小説とみなしうる。が、その範疇からすると、容認し難い事項が二つ、text 内に存在する。一つは〈鯨の木〉であり、今一つは、〈縮む男〉である。

この一つは共に、作品内の、ある特定の人物の発話の中で言及され、その存在を主張されている。しかし、text 内における客観的記述は、その存在を明確に保証してはいない。二つの命題が、真か、偽か、は、text 内では明かされないままに終る。

が、ここで翻って考えると、text は、この命題の真偽を問うというより、むしろ、その疑問を超越する方向に進展していると考えうる。すなわち、〈鯨の木〉〈縮む男〉という陳述 statement は、真な偽かを問う事実確認的陳述 constative statement⁽⁸⁾としてよりむしろ、遂行的陳述 performative statement として機能するのである。

その機能とは、小説「洪水はわが魂に及び」の text をカストロフへと誘う、決定的な転換点の役割である。この機能は、大木勇魚の認識者としての identity 確保という一方の主題とも密接に関係する。特に〈鯨の木〉は、その発現の形態において、小説の三人称的視点人物としての大木勇魚の存在とほとんど重複して作動するのである。

4. 〈鯨の木〉について

あんたが本当に樹木と鯨の代理人だと信じているとして(略)、あん

たは「鯨の木」という名前を聞いたことがないか？⁽⁹⁾

これが、〈鯨の木〉についての、最初の言及である。喬木の語った〈「鯨の木」という名前〉を聞くや、大木勇魚は「鯨の木」の、〈巨大な幻〉を思い描く。それは、クジラの形をした巨大な樹木であって、無論、現実的なものではない。

続いて、喬木もくだまし絵のように、何十頭もの鯨がおしあいへしあいしている「鯨の木」⁽¹⁰⁾を語るが、これも彼の想像上のものである。事実、彼自身、〈「鯨の木」を実際に見たわけではない〉⁽¹¹⁾のだ。しかしなお、彼はその実在を主張し、勇魚の方でも〈「鯨の木」をめぐっての、いかなる挿話をも従う意志がない〉⁽¹²⁾つまり、「鯨の木」は、その実在性も、外見さえもつかない知れぬままに、勇魚の思考の中に、ということは、語り主体としての視点人物の機能の内部に、組み込まれてしまっているのである。

——おれの地方に「鯨の木」があったことは、おれはそれを見なかったといったけれども、むしろそれだからこそ確かなんだよ、おれはそれを見ることを妨害されたんだからね⁽¹³⁾

大江の小説に頻発に現われる、独特の論理形式の表現である。喬木は、その〈妨害〉の理由を、〈「鯨の木」の役割というか、意味づけというか〉⁽¹⁴⁾であると主張する。

すなわち、「鯨の木」とは、その根方において、村で罪を犯した者とその家族とが、裁判を受け、その場で、村人全員から石を投げつけられて、処刑されるための〈場〉である。喬木は、これを、生死の境をさ迷う熱病の夢の中で目撃したのだが、その中では、「鯨の木」の葉全体のまとまりが一つの巨大な〈スクリーン〉を形成し、その〈「鯨の木」のスクリーンに、当の「鯨の木」も〉含めて、処刑のありさまが映し出され、喬木はそれを見て〈もう一度始まる！〉⁽¹⁵⁾と叫ぶ。

この物語について、大木勇魚は全面的に信用してしまう。というのも、喬木が彼にこの話をしたのは、勇魚という人間がくほん当に「鯨の木」について聴きたがっていて、聴いたあとで、思いつきの解釈をいってみようとしないう人間⁽¹⁶⁾であることを見抜いていたからである。

「鯨の木」に関する, constative statement は, ここでひとまず完了する。ここまでに, 「鯨の木」は,

- ①「鯨の木」という名前。
- ②勇魚の見一幻。
- ③喬木の語る幻。
- ④実際には喬木は見たことがない。
- ⑤それは「隠されているからである。
- ⑥その根方では「裁判」「処刑」が行われる。
- ⑦その情景が「鯨の木」のスクリーンに(木それ自身をも含めて)映し出される。

という, 情報内容として, text 内に顕われる。

大木勇魚は, この対話を契機として喬木と理解を深め, やがて自由航海団に加入することになる。

5. 「縮む男」について

「鯨の木」に関する言及が, 勇魚にとっての, 自由航海団加入の契機になるとすれば, 自由航海団の側で, 勇魚を受け入れる契機となるのは「縮む男」である。

自然法則に逆行して肉体が縮み, やがては自己の内部に爆発して死ぬ運命にある「縮む男」——あるいは, そう称している狂人——が, 大木勇魚と自己との類似性を確認することにより, 他の青年達も, 皆, 勇魚を〈おれたちの味方〉, 少なくとも〈警察の側とは対立する人間〉とみなし, やがて, 〈言葉の専門家〉として受け入れるようになる。

さらに, 「縮む男」と勇魚との対話は, 勇魚が, 過去に, 少年殺害に加担したという「告白」を導き, それが彼の〈樹木と鯨の代理人〉〈人類の未来に何も貢献しない人間〉としての identity 保証を与える。そして, 勇魚に対し, 最も反抗的であったボオイが, その〈告白〉を真剣に受け止め, 怒り, しかしなお, それについて〈「許せ」という幻を見た^{ビジョン}〉こと, それを勇魚に告げ, 勇魚もそれを認めることにより, いわば一つの入団の儀式が成立し, 勇魚は, 自由航海団に迎え入れられることになる。

ここで確認しておきたいのは, 「鯨の木」にせよ, 「縮む男」にせよ, (ま

たは、より機能は小さいがポオイの幻も) text 内において、確実にその時点〈今、ここ〉で生起している event ではなく、作中人物の発話内における単なる言葉でしかないということである。さらには、この statement に関しては、第三者的な保証が与えられていない。視点人物たる大木勇魚は、その是非については口を閉ざし、ただ、その発話を受け容れている。

すなわち、「鯨の木」や「縮む男」は constative statement としては、真か偽かの確証はなされないままである。が、それぞれの発話者がそれについて主張し、さらにはその主張が他者の行動を規制し、制限し、進展させる、という意味において、遂行的陳述として大きく作用しているのである。

この時点における一次的な意義は、「鯨の木」「縮む男」について会話し、それを信用することにより、勇魚が自由航海団に正式加入するという event の契機となることである。一人の〈認識者〉が〈行動者〉の群れに身を投ずるのだが、ただ、これをもつめ、勇魚が〈行動者〉に変質するわけではない。彼の地位は、〈言葉の専門家〉という特殊なものである。また、text 内において、青年達の行動を見続け、discourse 化する、という、視点人物としての契機も、それらの event に対する〈鯨と樹木に対する魂の代理人〉としての意味づけも、依然として続行している。

この「認識」が、まさに一つの〈跳ぶ^{リープ}〉により、〈行動〉と合一一致する契機は、〈「鯨の木」下で〉の〈「縮む男」の審判〉という event である。そしてこの事件により、小説の story は、決定的な段階へと進行する。

6. 「縮む男」の審判

「縮む男」の最大の機能は、〈裏切り〉と〈審判〉、そして〈処刑〉にある。

彼は、自由航海団の〈軍事訓練〉を撮影し、写真を週刊紙に売るという〈裏切り〉行為を働き、その〈審判〉において、自身を〈処刑〉せざるをえないよう、青年達を追いこむ。その理由は、この〈処刑〉によって、自由航海団を〈縮む男〉の使徒) たらしめく〈縮む男〉の予言) ——世界の終末の警鐘——を〈人間ども〉に対して聞かせることにある、と主張するのである。彼にとっては、この〈裏切り〉〈処刑〉されることが、自己の、「縮む男」としての identity であり、「縮む男」としての自己主張の、一つ

の論理的帰結である。

〈審判〉の過程で、それまでは問われなかった疑問が提出される。それは「縮む男」とは、

- ① 真実、物理的に「縮む男」なのか。
- ② そう信じているだけの、精神的な「縮む男」なのか。
- ③ あるいは、「縮む男」を装って、若い男との同性愛や、特ダネ写真の撮影の目的で入り込んできた卑劣漢なのか。

という問いかけである。そして〈裏切り〉の目的についても、

- ① 真実「縮む男」の予言を達成させるためか。
- ② 狂人の思い込みでそう挑発しているのか。
- ③ 特ダネ写真の値段をつり上げるため、〈爆発〉を挑発しているのか。
- ③' 若い男に処刑されて死ぬことで、自己の変態性欲を満たそうとしているのか。

という可能性が提出される。

おそらく、リアリズムの立場からすれば、③、③'、③''の考え方が最も妥当性を持っている。が、textは、それらの可能性を選択させようとしな

い。〈真相〉が何なのか、解明されぬままに、「縮む男」の〈処刑〉という event が生起し、それはより大きな event——自由航海団と〈人間ども〉との全面対決というカタストロフへと進展する。すなわち、「縮む男」の命題が確認されぬままに、結果的に、〈縮む男〉の予言が成就されることになるのだが、その遂行機能を果たすのが「鯨の木」であり、さらには、視点人物としての大木勇魚なのである。

7. 「鯨の木＝大木勇魚」の下で

自由航海団の青年達だけでできることは、(彼ら自身も言っている通り)、せいぜい、「縮む男」から金を奪い、袋叩きにして追い出すのが関の山である。その袋叩きの過程で木の枝を肛門に突き刺して内臓を傷つけたとしても、そこまではまだ〈事故〉である。

ここで、「鯨の木」が介入する。

「縮む男」は、〈鯨の木〉の下で 処刑されることになるのである。喬木が語り、勇魚が承認した方法で、広場の中心で、共同体に属する全員か

ら石を投げつけられて、殺されるのである。

この時点においては、先に述べた通り、はたして「鯨の木」が実在したかどうかについては、事実確認はなされていない。命題としての真偽は明らかにされていないのである。しかるに、その言及が逆行的に機能し、〈裏切り者〉に対する〈審判〉、そして〈処刑〉に至るプロセスを決定づけてしまっているのである。喬木が夢の中で叫んだ通り（あるいは、そう主張した通り）、〈処刑〉はくもう一度始まる！。discourse〈鯨の木〉がevent〈処刑〉を敢行させたのである。そして、この結果、自由航海団には、一つの明確な identity が与えられる。「縮む男」殺害の共同正犯である。

一人、大木勇魚は投石を拒否する。「縮む男」の〈審判〉にも口をさし挟まないし〈処刑〉にも手出しをしない。では、彼は、これをもって、この story から離れてしまうのだろうか？

否、彼の機能は何よりと大きい。彼は視点人物なのである。

彼は text 内における discourse の主体である。彼は〈審判〉、〈処刑〉を目撃し、彼の視たものが、視ている彼も含めて、text 上に、represent されている。

ということはつまり、勇魚は、喬木が語った〈「鯨の木」のスクリーン〉の機能を——自らを含めて処刑のありさまを映し出す——まさにそのまま果たしているのである。text 内で同じ機能を果たす、つまり、大木勇魚は「鯨の木」に同化するのである。

と、今さらのように気づくまでもない。文字通り、大木勇魚とは「鯨の木」の謂である。

喬木が〈処刑〉の方法を決定した時、〈勇魚は自分がいま、喬木の「鯨の木」の実在をこれまでに強く信じているのを認めた〉のも無理はない。彼自身が「鯨の木」そのものなのである。

喬木が勇魚に語った時点では、「鯨の木」はあくまでも単なる言及の域を出ず、その実在は確認されていない、absence でしかなかった。しかし、現在、〈処刑〉という遂行的機能を果たし、それを視ている大木勇魚が、「鯨の木」そのものとしてそこにいる。すなわち、absence だった「鯨の木」は、ここに現前 presence するのである。

勇魚は〈処刑〉に参加しない。「鯨の木」は石を投げたりはしない。ただ、そこに存在し、そのさまをスクリーンに映し出すだけである。そして、そ

れによって、〈処刑〉そのものを成立せしめている。勇魚もしかりである。彼が discourse の中心にいて、〈処刑〉という event は（小説内のすべての event も同様であるが）成立している。そして、この、「鯨の木＝大木勇魚」の機能において、もう一つの課題であった、認識者と行動者との二項対立は完全に超越されることになる。

〈処刑〉以後も勇魚の〈スクリーン〉機能は作動し続ける。自衛隊員の〈逃亡〉とその〈追跡〉と死、ボオイの戦いと死、という一連の event に関しても、勇魚はその場におらず、伝聞として聞く。彼が聞いたことによって、event は、text 以上に represent される。

自由航海団の側でも、「鯨の木」は必要不可欠なものである。本来、〈処刑〉に参加しなかった〈反省者〉は共同団体から追放されねばならないのだが、勇魚にはそんな掟は適用されない。彼は自分のいるべき所にいればいいのである。村人は、用があれば、「鯨の木」の根方に集合する。事実、勇魚がシェルターに帰った時、自由航海団は、丸ごと彼のもとに引越して来ているのである。

8. 逆転構造——不在から現前へ

「鯨の木」だがな、あれはあんたを「自由航海団」に引きこもうとしていい加減なことを言ったんだよ!⁽⁷⁾

最後の土壇場で、喬木はこう告白する。「鯨の木」は、constative statement として、偽であると判明した。

が、しかし、「鯨の木」は、preformative statement として、既述の通りの機能を果たしたし、何よりも、大木勇魚自身が「鯨の木」として現前している。

「鯨の木」が実在しないとしてもおれには深刻な影響はないよ!⁽⁸⁾

ど勇魚が答えるのは、当然至極なのだ。

彼は「鯨の木」に導かれて「自由航海団」に入り、「鯨の木」の下で、むしろ、自身が「鯨の木」として「縮む男」を処刑せしめ、さらに「自由航

海団」を自己のシェルター内に引きこむ。しかし、〈引きこまれた〉のは「自由航海団」の方なのである。

——きみたちが人間に向かって撃てば、その傍にいるおれは、樹木と鯨の代理人としての態度をはっきり表明できると気がついたんだよ。

(略)

——おれたちはあんたの樹木と鯨のために、人数ばかり銃までかき集めて、ここに籠城したことになるのかね？ それならばまあそれでもいいんだがな⁽¹⁹⁾

かくて勇魚は「自由航海団」のスポンサーとして、「樹木と鯨の魂の代理人」の identity を確立される。そういう〈ことになる〉のは彼が、認識者＝視点人物＝鯨の木＝スクリーンとして機能しているからである。

一方、「自由航海団」の側でも、この銃撃戦の中で、自身の identity を獲得している。

今や、「自由航海団」は、こんなに現実き実在しているんだからな。

(略) 今度こそ、「自由航海団」のクルーザーを出発させることができるように思うよ⁽²⁰⁾

このプロセスの中で〈「縮む男」の予言は成就〉された。ということはつまり、「縮む男」もまた、「縮む男」として実在したと言ってさしつかえないのである。

「鯨の木」、「縮む男」、「自由航海団」、「樹木と鯨の魂の代理人たる大木勇魚」、これらは全て、text の前半部分において言及され、その実態はいかがわしい、真か偽かに分類しようとすれば偽に近いもの、absence であった。そして、事実、「鯨の木」に関しては、absence が確認された。が、その時には既に、text の discourse の中で、これら全ては presence に逆転してしまっているのである。そして、その逆転構造の根幹にあるのは、「鯨の木＝大木勇魚」の、スクリーン＝視点人物＝認識者としての、performative な機能である。

さらに、この機能のプロセスにおいて、認識者／行動者という、旧来の

二項対立もまた逆転する。むしろ、超越される。作品の終結する時点で、認識者、大木勇魚は自ら銃を手にし、〈人間ども〉に向かって乱射し、死を迎える。

これまでかれは、「樹木の魂」「鯨の魂」への語りかけをいくたびくりかえしてきたかしのれないが、樹木も鯨もそれに直接答えることはなかった。それがいまになって、じつに明瞭な総まとめの返信を送ってよこしたのだ⁽²¹⁾

彼の認識者としての立場の究極が、「鯨の木」と化すことであり、その帰結が銃撃という〈行動〉となった。そして、その〈行動〉の中で、彼の〈認識者〉としての地位も確立する。そしてこの時、小説の語り narrative は、完全に勇魚の支配下に移行する。外部世界には核戦争が生じ、リアリズムは崩壊し、〈洪水〉の中で、人類は滅びようとしているのである。

結 び

本稿における主題は、小説「洪水はわが魂に及び」内での、大木勇魚の、人間像としての、認識者／行動者の二項対立の超越であった。この〈超越〉を成立させるのが、認識者＝視点人物としての text 内での機能であり、その機能を具現化するものが「鯨の木」であった。

すべての event に先行し、はじめに「鯨の木」ありき、なのである。しかも、これは、実在物としての「鯨の木」にあらず、単なる discourse としての「鯨の木」であった。この discourse が出発点となり、様々な event を生起せしめ、必然的に「洪水はわが魂に及び」という小説の story そのものを生起せしめたのである。その performative function の作動のプロセスにおいては、本来の、constative な命題としての真偽はいとも簡単に乗り越えられ、absence が prsence に逆転してしまう。そして、text を支配するその逆転構造のプロセスの中で、認識者／行動者の二項対立も、すみやかに超越されるのである。

大木勇魚が文字通り「鯨の木」となり、「鯨の木」たることが、彼の、認識者＝行動者としての identity を成立させる。discourse がその story を成

立させるのである。この作用は、小説——narrative fiction というものの
ありかたの、まさに言語活動の真髄だと言えよう。「洪水はわが魂に及び」
は、discourse の本性によって、きわめて見事に作り上げられた story
——小説なのである。

【註】

- (1) 『大江健三郎全作品第六巻』 P. 326 (新潮社)
- (2) 以下、作中からの引用は、新潮社刊『洪水はわが魂に及び』上・下巻
(1973年9月)
- (3) 本稿における用語の概念規定
text——テキスト。作品本文そのもの。
story——ストーリー、作品の深層構造として存在する物語、筋立て。
discourse——ディスコース、言迷。作品の表層に顕われている言葉のあり
よう。
event——イベント、出来事。作品内における、個々の出来事。
action——event を形成する、人物・事物の動主・変化。
absence——不在。今・ここに存在しないものごと。
presence——現前。今、ここに存在するものごと。
represence——再現。存在しないはずのものを、再び現わす。
identity——アイデンティティ、自己同一性。基本的に、人間が自分自身
たる自我を確立するものごと。
- (4) 上巻 P. 14
- (5) 上巻 P. 16
- (6) 上巻 P. 71
- (7) 上巻 P. 86
- (8) constative と performative の二項対立に関しては、概ね J. L. Austin
の理論に従う。J. L. オースティン『言語と行為』坂本百大訳 大修館書
店 (1978年)
- (9) 上巻 P. 89
- (10), (11), (12) 上巻 P. 91
- (13) 上巻 P. 113

- (14) 上卷P.110
- (15) 上卷P.114
- (16) 上卷P.117
- (17) 下卷P.231
- (18) 下卷P.232
- (19) 下卷P.140
- (20) 下卷P.232
- (21) 下卷P.243